

【「梅花の歌三十二首」が詠まれた十年後】

令和は、『万葉集』巻五の「梅花の歌三十二首 并せて序」(七九三～八四八)の中から見出されました。この大きな作品、実はこれだけに終わらないんです。直後には「員外故郷を思ふ歌両首」(八四七～八四八)と「後に追和する梅の歌四首」(八四九～八五二)が記されています。凜とした「三十二首」とは区別されながら、宴に参加できなかった者(員外)の作として、都人の郷愁が添えられています。その後に「三十二首」は読み継がれたことが、「追和」の作に表現されています。大伴旅人は、試みが一回の宴で終わるのではなく、未来に継承されることまでを願っていました。その志は、父から子どもたちへと受け継がれていきます。例えば『万葉集』巻十七には、十年後の天平十二年(七四〇)。旅人の子書持が、「大宰の時の梅花に追和する新しき歌六首」と題した歌を詠んでいます。その一首目には、

み冬継ぎ春は来れと梅の花君にしあらねば招く人もなし

民布由都藝 芳流波吉多礼登 烏梅能芳奈 君尔之安良祢婆 /遠久人毛奈之

(三九〇一)

とあります。「冬に継いで春が来たよと梅の花、あなたでなければ招く人もいません」と。この歌は「三十二首」の一首目の歌を応用しています。初句に注目すると、梅の花が咲く春は、それだけで存在しません。冬からの継続が示されています。歌が季節分類された巻八や巻十を開いても、冬の歌に雪と重ねられた梅の花を見つけられます。梅の花は冬にも詠まれ、新たな春の到来へと期待をつないで楽しめました。

私たちも、冬の梅に令和元年を振り返り、新たな春に良い年を期待したいですね。

【『City Life』 2012年1月号掲載】